

# 『DAS ANDENKEN : AN DEN ABGANG』

## 小林祐史写場編纂、1934年発行の京都高等工芸学校アルバムについて

京都工芸繊維大学博士後期課程 滋賀県立美術館（学芸員） 菅高郁子

比叡を仰ぐ  
高野の川べり  
かくも麗しき彩りの  
うつり變りに浸りてぞ  
三とのせ春 秋は逝く  
この親しき學窓  
集ひ語りし學友の  
輝しき思出を緋かん

深い青緑色をした布張りの表紙には、ドイツ語で「DAS ANDENKEN : AN DEN ABGANG」とタイトルがある（図1）。ANDENKENは「記念品」、AN DEN ABGANG



図1



図2



図3

は「門出に際して」とでも訳せば良いだろうか。上述の詩は巻頭に、高野川から望む比叡山の写真とともに記されたものだ（図2）。本書は、京都工芸繊維大学美術工芸資料館の展覧会「デザインの夜明け―京都高等工芸学校初期10年」と連携し、附属図書館で開催されていた「京都高等工芸学校 開校120周年記念特別展示」（会期：2022年10月3日～12月17日）の出品資料の一つである。この資料は、他の年代の京都高等工芸学校卒業アルバムとともに展示されたが、他と比較し、明らかな異彩を放っていた。

本アルバムには書誌情報の記載がほとんどなく、これが何のため

に製作されたのかについては、現時点の調査では、残念ながら憶測の域を出ない。ただ他の卒業アルバムには、その年の卒業生の写真が掲載されているのに対して、本アルバムにはそれがなく、構成も大きく異なっている。また、本アルバムには巻頭の詩だけではなく、他にもいくつかの詩片が挟まれている。日本語であったりドイツ語であったりするそれらの詩片は、本書を単なるアルバムではなく、コンセプトブックのようなイメージ伝達の媒体へと昇華させている。しかし、異色である点はそれだけではない。本アルバムにおいて注目すべきは、むしろそのデザイン性にある。卒業生個人の写真や、卒業旅行などを写した一般的な卒業アルバムとは異なり、試作的なグラフィック表現がいくつも試みられているのだ。

本アルバムが制作された1934年は、日本写真史の転換期ともいえる時代の只中にあつた。スナップショットや極端なクローズアップ、広角、俯瞰での撮影、フォトグラム、フォトモンタージュといった技法を用いて、それまでの芸術写真とは異なるカメラやレンズによる機械の眼を生かした表現を試み、主に1930年代に主動された新興写真と呼ばれたその動向は、当時の写真表現に大きな変化をもたらした。そしてそれは芸術表現にとどまらず、広告写真やグラフィックデザインにも大きな影響を与えた。

唯一の書誌情報である巻末の奥付には、「撮影と編纂と制作 小林祐史写場」と記されている。小林祐史（1898-1988）は、山口県徳山市に生まれ、9歳の頃に京都市で写真館をしていた叔父を頼って京都に移住した人物である。1918年には、東京美術学校（現・東京藝術大学）臨時写真科に入学。大学卒業後は京都に戻り、叔父の小林写場を手伝い、後に写場を引き継いだ。この小林祐史写場は現在も中京区寺町に建物が残っている。1925年、京都で活

躍していた写真家らによって結成されたK・P・S（キョウト・ホト・ソサエテ）の中核メンバーとなり、1930年代より『フォトタイムス』（フォトタイムス社）に作品を発表、論説を掲載。同誌を通じて、同時代の写真家や前衛画家と交流し、新興写真の思想を受容した。この頃から作風が芸術写真から実験的技法を駆使した前衛的なスタイルに変化してゆく。

本アルバムには、写真館を営みながらも、当時すでに前衛写真家としても活躍していた小林の鋭敏な感性が表れている。

例えば、京都高等工芸学校の校門を撮影した写真（図3）には校歌のものと思しき楽譜、化学の授業中の写真（図4）には化学式が重ねられ、学舎や学生の日常風景に抽象的な記号が付与されている。

またタイポグラフィと写真やソラリゼーションを組み合わせたリ（図5）（図6）、教科書とペン先、そしてその影を巧みに構成するなどのグラフィックデザイン的な表現も見出すことができる（図7）。

学生生活を掲載する際も、カラージュのように繋ぎ合わせ、さらに数字の形に切り取るというユニークな写真表現が使用されている（図8）（図9）。この二つのコラージュは、京都高等工芸学校創立30周年に開催された記念祭を写したもので、30周年に即して「3」と「0」にトリミングされ、当時の様子を知る上でも非常に貴重な資料だ。

『DAS ANDENKEN : AN DEN ABGANG』と題された本アルバムの興味深いところは、当時、最先端であった新興写真の表現をいかに商業的なアルバムに落とし込むかという挑戦にある。作品を生み出す前衛写真家であり、写真館を営む営業写真家でもあった小林祐史の本アルバムにおける試行は、写真を使用したグラフィックデザインの重要な初期的動向として位置づけることができる。

最後に、美術工芸資料館、附属図書館では、本学の歴史に関する資料を収集しています。お手許に關係資料をお持ちの方はご連絡いただければ幸いです。



図4



図5



図6



図7



図8



図9

掲載図版、図1～図9は全て『DAS ANDENKEN : AN DEN ABGANG』に所収。

参考文献  
・植木昇、小林祐史、金子隆一  
『K・P・Sの時代―植木昇 小林祐史』  
2018年 MEM